

戦艦「陸奥」の主砲砲身の価値について

呉海事博物館評議委員 平間洋一

I. 戦艦「陸奥の価値」



1. 戦艦は国家の威信と誇りの象徴
 - (1) 「陸奥と長門は国の誇り」
昭和の『少年倶楽部』付録の「カルタ」
2. 抑止力としての戦艦
3. 陸奥と横須賀
 - (1) 大正7年6月1日に横須賀海軍工廠で起工
 - (2) 大正9年5月31日に進水、翌10年11月22日に竣工

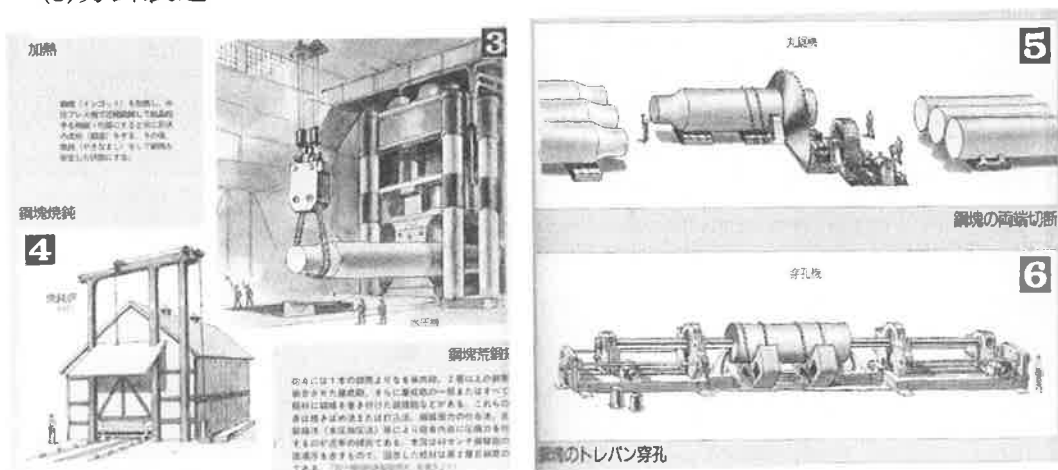
4. 陸奥の性能と世界の戦艦との比較

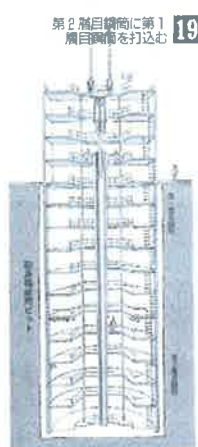
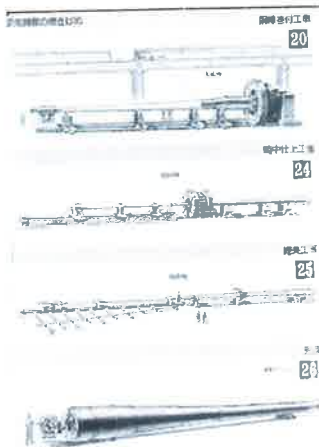
- (1) 陸奥の性能要目：3万3800ト、全長216m、16インチ砲4門、速力26.7ノット（世界最速）
- (2) 当時の世界の戦艦の性能要目の比較
当時の世界の戦艦は38cmが主流、ドイツは35cm

II. 陸奥の主砲の価値について

1. 陸奥の主砲の斬新性

- (1) 最初の国産：16吋、仰角30度、最大射程3万2000m、砲弾重量1020キロ
世界の趨勢は38cm砲、陸奥は41cm砲で（戦間期は世界最大）
- (2) 主砲の特徴は重層（3重）ワイヤー巻き付け方式（陸奥のみ）
- (3) 最先端の射撃装置：基線長10メートルの測距儀と射撃計算機（アナグロ）
- (4) ジェットランド海戦の戦訓を取り入れ画期的な艦内防御（装甲）
- (5) 方針製造：26の工程→龐大な施設が必要（現在も日立バブコックが使用中）





2. 現存する陸奥の遺品

- (1)大和博物館；砲身（完全）・錨・スクリュウ
- (2)山口県屋代島の陸奥記念館：艦首・スクリュウ
- (3)長野県聖高原の聖博物館：砲身（尾栓・先端部分）
- (4)東京の船の博物館：完全な砲身



3. 今後の対策

- (1)今後への進言
- (2)現物の価値（Only One）でない
と継続しない（ティボデイ邸も同様）
- (3)三笠は不景気の救世主
 - ・「海と空の博覧会」（上野と三笠）
 - ・昭和5年3月20日—5月31日
 - ・来訪者80万・兵器と物産



- (4)海軍資料館とならざるを得ない
（横須賀は軍港以外生きる道がない）

